

紀伊国・雑賀の里

孫一と雑賀鉄砲衆

——和歌山で「孫一たちのゆかりの地」を歴史散策——

戦国乱世の時代

孫一たら雑賀衆は自由に生き

ふるさとをまもるため果敢に戦った!!



「八咫一(やたいち)」
©はねベン



雑賀衆の基礎知識

雑賀の里 / 雑賀衆 / 孫一 / アイテムと戦術



雑賀衆の二つの戦い



雑賀衆ゆかりの地を訪ねて



まちづくりの活動紹介

※「八咫鳥(やたがらす)」は「孫一」の家紋であり、雑賀衆の旗印

中世末期(戦国時代)の紀伊ノ国雑賀の里

「雑賀の里(さいかのさと)」

「雑賀の里」とは、現在の和歌山市全域と海南市の一部を含んだ地域です。紀ノ川の河口部の雑賀荘、十ヶ郷、中郷(中川郷)、社家郷(宮郷)、南郷の5つの地域からなっていました。

ポルトガル人の宣教師ルイス・フロイスは、ローマに送った書簡のなかで、戦国時代の雑賀を次のように記しています。

『要衝雑賀は、難攻不落の観があった。すなわち、二方面は海に囲まれ、他の一方面には水量豊かな川が流れ、第4の方面には険しく高い山岳がそびえ、しかもそこは1箇所しか入り口がなかった』と…。

戦国時代の雑賀は、現在の和歌山市と相当違いました。とくに紀ノ川の河口は、2つから3つに別れ、一つは雑賀川(和歌川)といい、南下して和歌浦湾に注いでいます。この雑賀川の東部が北から中郷、社家郷、南郷という三つの地域で肥沃な農耕地帯です。

紀ノ川本流と雑賀川に挟まれ海側の地域が雑賀荘、紀ノ川の北側が十ヶ郷です。この雑賀荘、十ヶ郷は一部を除いてほとんどが砂地で、現在も「砂山」「吹上」などの地名が残っており、農耕には適さない地域のため漁業や海運が盛んな地域でした。

宗教は、当時の生活や人の繋がりを考える上で、仕事とともに重要な視点です。雑賀荘には雑賀御坊(現在の鷲森別院)があり、雑賀荘、十ヶ郷には一向宗(浄土真宗)の門徒衆が多かったです。しかし、鎌倉時代の創建である総本山梶取総持寺の関係で、浄土宗の関係者も相当あったといわれています。

また、東部の中郷、社家郷、南郷は、新義真言宗の影響が強い地域です。新義真言宗は、雑賀の東にある根来寺が総本山で「根来衆」といわれる僧兵集団で有名で、雑賀の東部地域に限らず全体的に関係が深かったといわれています。さらに、紀伊国造家(きい、こくそうけ)である「日前宮」や雑賀の護り神という「矢ノ宮」をはじめ古くからの信仰も生きていた地域です。



和歌浦は、万葉の時代から景勝地として有名で、雑賀衆ゆかりの場所も多い。

雑賀衆の多くは、海の民である。海辺や河川の河口部を利用して港をひらき、漁業や海運・交易に従事していた。また場合により水軍として戦場に出かけることもあった。





中世末期（戦国時代）の雑賀の地形は、現在と相当違い、とくに紀ノ川が三つに分かれて雑賀の里を複雑に流れていた。
 雑賀は、雑賀荘・十ヶ郷・中郷・社家郷・南郷の5つの里の総称で現在の和歌山市の全域と海南市の一部を含む地域。
 雑賀荘・十ヶ郷は、砂洲や砂丘地帯が多く、農耕に適していないが中郷・社家郷・南郷は農耕地帯。
 また、雑賀には自然の地形を生かした城や砦が数多くつくられていた。

自由の民「雑賀衆」(さいかしゅう)

「雑賀衆」とは、雑賀の里に住む人々の総称で、今でいうと「和歌山市民」ということになります。

戦国時代の雑賀には、他の国のように戦国大名や領主がいなく、100年近くも独立国家であったといわれています。

雑賀には、50家以上の国人、小豪族がありました。しかし、日頃は農業・漁業・鍛冶・商業・海運業など様々な仕事に従事していました。

そうした人びとや一般民衆は「惣」と呼ばれる共同体組織をはじめ地縁・血縁、仕事・宗教などのつ関係をもとにしたグループをつくり、そのグループ同士も互いに連帯していました。こうしたつながりは、鎌倉時代から全国に存在していましたが、そのほとんどが戦国大名の登場によって解体させられました。雑賀では強大な繋がりをつくり、戦国大名にならぶ勢力にまで成長していました。

雑賀の運営は、地域や共同体組織の代表で構成された「年寄」の会議で行なわれていました。しかし、雑賀の外に対しては団結力が働くが内部では、大きく二つのグループに分かれていました。

「雑賀衆」のなかでも雑賀荘・十ヶ郷には、もともと熊野水軍の流れをくむ人びとが多く、「さつまあきない」といわれる海運・交易を盛んに行かない、紀伊水道を南下し、四国、九州沿岸をへて海外とも商いをおこなっていました。

「雑賀衆」を有名にしたのは当時の最新兵器「鉄砲」で、常時5~8千挺の鉄砲があったといわれています。また、時と場合には「水軍」としても活躍し、各地の戦国大名に雑賀水軍に関わる記録に残されています。

< 雑賀衆の状況 >

	雑賀荘・十ヶ郷グループ	中郷、社家郷、南郷グループ
主な仕事	漁業・海運・商業	農業
宗教	一向宗・浄土宗	真義真言宗

戦国のヒーロー「孫一(まごいち)」

孫一は「雑賀孫市」として有名ですが、本当の名は「鈴木孫一」といいます。平井という所に住んでいたため「平井孫一」ともいいます。本人の直筆の署名を見ると「鈴木孫一」「さいかの孫一」としています。また孫一は、『雑賀城城主、鈴木佐太夫』の息子といわれていますが、孫一や一族のことは様々な説がありはっきりしていません。

また、孫一の性格は、「合理的」「楽天的」「勇猛果敢」だと推察されています。

孫一は、傭兵として雑賀鉄砲衆を率いて各地を転戦して次第に名を上げていきますが、その存在を決定的にしたのが織田信長と石山本願寺の合戦でした。

孫一は、織田信長と何度も戦い、その三度すべてに勝利しました。

一度目は、1576年5月、石山本願寺を取り囲んだ信長の大军と天王寺砦などの攻防戦で勝利しました。『信長公記』では、「天王寺砦の戦いで、雑賀衆の銃弾を受け信長が足を負傷した」と記されています。また、その直後の木津川口の海戦でも毛利・村上水軍と共同で水軍を率いて戦い、信長側の九鬼水軍を壊滅させています。毛利家の記録では、作戦のほとんど孫一ら雑賀衆が行ったとしています。

その次に信長と戦ったのは1577年(天正5年)2月、信長が10万の大軍を率いて雑賀攻めを行った時でした。圧倒的な織田軍を相手に、様々な知略とゲリラ戦で1ヶ月間も戦い、和睦という結末で織田軍を引き上げさせました。また、直後の7月にも信長は雑賀に7万の大軍を送るが、またも大失敗を期するのです。

信長は、雑賀を攻略することをあきらめ孫一ら雑賀衆と和睦をし、これによって雑賀の平和が戻り、孫一も出家したといわれています。しかし、本能寺の変で信長が討たれた直後、孫一は雑賀から忽然と姿を消しています。

孫一は、織田信長の最大の敵として、「八咫鳥」の旗を掲げ、鉄砲衆を率いて戦場を駆けめぐった!!



雑賀衆のアイテムと戦術

雑賀水軍(さいかすいぐん)

雑賀衆、とくに雑賀荘・十ヶ郷には漁師・海運・交易に関わる人々が多くいました。

通常は、そうした業についていましたが、戦いになると水軍として戦場に出向きました。

1576年の木津川の合戦では、毛利・村上水軍と共同で織田側の九鬼水軍を壊滅させています。

雑賀水軍は、村上水軍などの大型の船と違い機動力重視の小型船を中心にした船団でした。

焙烙(ほうろく)

手投げ爆弾のようなもの。木津川口の海戦で相手の船に投げ込み多大な被害を与え、圧倒的勝利をえたきっかけになった武器。

雑賀鉢(さいかばち)

「鉄砲」とともに雑賀衆のアイテムとして有名な「兜(かぶと)」。

当時、戦国武将がこぞって相手への威嚇を目的に、派手な装飾をおこなっているものが多いが、「雑賀鉢」といわれる「兜」は装飾がほとんどなく、大陸の影響を受けた極めて合理的な形をしています。

「雑賀鉢」は、本願寺鷲森別院近くで発見されているが、この周辺には「鉄砲製造」の話も残されており、レベルの高い鍛冶が製造したといわれています。



鉄砲(てっぽう)

雑賀衆といえば「鉄砲」です。

当時、5千挺以上の鉄砲を持っていたといわれています。大名のコレクションや戦場での脅かしのためのものだった鉄砲を雑賀衆は技量を高め戦術を完成させ戦国最強の鉄砲集団として名を轟かせました。

また、根来衆も鉄砲衆として有名です。



戦術(せんじゅつ)

① 連射

当時の鉄砲の欠点として、玉込め、火縄、発射まで時間がかかること、雨の日は役に立たないと思われていました。しかし5人程度の小グループに分かれ、役割分担(玉込め・射撃など)をしたとか、時間差によって連射を可能にするとともに、笠などの工夫によって雨の日でも問題なく使われていました。



② ゲリラ戦など

相手に対して正面から向かうのではなく、少人数で静かに近寄り、確実に攻撃を加えている。とくに織田信長の雑賀攻めに対し、地理に詳しい雑賀衆が的確にダメージを与えてきました。

雑賀衆は、既成の武士たちのように面子・体面・名誉は関係なく、正々堂々という言葉も雑賀衆には無意味であったと思われます。これは、卑怯ではなく圧倒的な信長の軍と戦う方法はこれしかなかったのです。また、これらの他にもありとあらゆる工夫や知恵を駆使して戦っていました。

鉄砲の伝来(てっぽうのでんらい)

鉄砲の伝来は、1543年(天文12)8月に種子島に漂着した中国人倭寇・王直を通じてポルトガル商人から領主種子島時堯が2丁の鉄砲を購入したのが始まりといわれています。時堯は、鉄砲の価値を見極め、配下の鍛冶・八板金兵衛に命じて、初の国産鉄砲の製造に成功させています。

種子島の鉄砲は、様々なルートで全国各地へ広まっています。

まず一番有名な「**堺**」ルートは、堺の鍛冶・橘屋又三郎が種子島にわたり金兵衛に鉄砲の製造方法を学び堺に持ち帰りました。その後、又三郎を中心に堺で分業システムによる大量生産を成功させました。

二つ目は、近江の国、「**国友**」ルートの場合、種子島時堯から足利将軍家に鉄砲が献上され、そこから国友に伝わり、鉄砲の製造が始まりました。

三つ目の紀伊国「**根来寺**」の場合は、根来寺の行人・津田監物が種子島鉄砲を入手し、自分の領地「吐前(和歌山市はんざき)」（根来寺という説も）で配下の鍛冶・芝辻清右衛門に製造を研究させ、生産をはじめていきます。

ただ、職人の移動や技術交流、分業システム、大名の要望などから、全国いたるところで鉄砲が製造されるとともに、西洋の鉄砲も交易を通じて鉄砲が各地に広まり、西洋をはるかに越える量の鉄砲が保有されていたといわれています。

雑賀衆は、もともと「雑賀鉢」に見られるように古代の「韓鍛冶」の流れをくむ優秀な鍛冶職人が存在していました。鉄砲製造についても「根来寺から製造方法を学んだ」という説や「堺の鉄砲の一部が雑賀で製造されていた」という説があります。

雑賀でも独自に製造していた。同時に交易によっても大量の鉄砲を買い入れていたと考えられます。また、雑賀衆の鉄砲は銃身の長さなど独特の工夫がされていたともいわれています。

国内各地で生産された鉄砲や外国から輸入された鉄砲は、商品として流通していきます。しかし雑賀衆は、製造及び輸入した鉄砲を商品ではなく、**自らの自衛の武器として5000~8000挺も保有していた**と記録に残されています。

雑賀衆関係年表

年代		主な出来事
1543年(天文12)	8月	種子島に鉄砲が伝来。全国に鉄砲製造が広がる。 雑賀衆、傭兵として各地に出向く
1576年(天正 4)	5月 7月	織田信長と石山本願寺の争いが激化 信長と本願寺の攻防で孫一ら雑賀衆に織田軍敗れる 木津川口の海戦。毛利・雑賀水軍が信長側水軍を壊滅
1577年(天正 5)	2月	信長、雑賀攻撃をはじめ。泉州へ10万の大軍を展開。 信長、6万で雑賀を攻撃 ※雄山峠越えから3万、雑賀侵入雑賀川左岸へ布陣 ※孝子峠越え3万、中野城を一日で攻略。平井城へ。 織田全軍、雑賀川左岸に集結、孫一らが迎え撃つ。 雑賀衆のゲリラ戦続く、戦況は、こう着状態へ。 和議が成立、織田軍が雑賀を完全撤退。雑賀で内紛、孫一掌握。
	8月頃	信長、再び7万の大軍で雑賀を攻撃。孫一ら迎え撃つ。 織田軍、雑賀から撤退。
1580年(天正 8)	4月	孫一出家、一向宗平井道場を建立。 孫一ら本願寺頭如を雑賀に迎える。 鷲森御坊を一向宗(本願寺)の拠点とする。石山本願寺合戦終わる。
1582年(天正10)	6月	本能寺の変。織田信長自決。 孫一、消息不明に。太田左近らが雑賀衆を掌握。 羽柴秀吉、織田家を掌握。
1584年(天正12)	1月	泉州で雑賀衆・根来衆らと秀吉軍の対立が激化。 紀州勢、大阪城に迫る。
1585年(天正13)	3月	泉州貝塚で秀吉軍と本格的な戦闘へ。紀州勢敗北。 秀吉、6万で雑賀攻めへ。秀吉軍、根来寺・粉河寺を焼く。
	3月末	秀吉、太田城を包囲。太田左近を中心に籠城。 秀吉、力攻めから水攻めへ。周囲10kに堤防を築く。 1ヶ月余りの攻防戦。和議、太田左近ら切腹。 太田城開城。(雑賀衆の終焉)
	4月末	直後、秀吉、和歌山城の築城始める。



孫一と雑賀衆は、自由のために戦った!!

～ 中世の終わり、近世の始まりの地 「雑賀」～

孫一ら雑賀衆は、はじめは「傭兵(ようへい)」つまり、戦国大名に雇われて戦場に出かけました。しかし、織田信長と石山本願寺の合戦が本格的になると、すすんで本願寺を全面的に支えていったのです。

それまで傭兵として戦場にでた雑賀衆が、お金に関係なく石山本願寺に加勢していった理由は、雑賀衆は一向宗門徒だったといわれてきました。しかし、実は雑賀衆は一向宗門徒だけではなく、様々な宗教を信仰している人びともいるのです。では、本当の理由は何だろうか…。

雑賀は、100年近くも支配者のいない自由な「くに」でした。もちろん上下の関係もなく、民衆に選ばれた「年寄り衆」といわれた人々によって運営されていました。いまでいう自治会の集まりのような感じです。

ところが、織田信長のめざした「天下布武」は、武力を背景にしたピラミット型の社会で、雑賀衆の社会とは相反する社会でした。織田信長に屈するということは

自由で平等な雑賀の終わりを意味していたのです。そこで、様々な状況を超えて雑賀衆は立ち上がっていったのです。

また、雑賀衆の存在は、信長が早くからすすめてきた「兵農分離」による専門の武士団を真っ向から否定する存在でした。信長の精鋭部隊は雑賀衆の放つ銃弾に次々と倒れていったのです。それは、戦争の形を変えただけでなく、血統や家柄に支えられ様々な武芸に鍛錬してきた武士の価値を否定するものでした。つまり、価値観の一大転換でした。

しかし、そうした雑賀衆も信長の後の秀吉によって終焉を迎えていったのです。それは、歴史が中世から近世に変わる大きなターニングポイントといえます。

「孫一ら雑賀衆」は、織田信長の最強の敵として、鉄砲を手に動乱の時代を果敢に生き抜いた「戦国のヒーロー」です。

雑賀衆の二つの戦い!

織田信長の雑賀攻め

戦国時代末期、天下流布をめざした織田信長は「一向宗(浄土真宗)」と各地で激戦を繰り広げていたが、とくに石山本願寺との直接対決でなかなか決着をつけられなかった。その原因は「雑賀衆」でした。木津川的大海戦で、毛利・雑賀連合軍に大敗をし、石山本願寺(現、大坂城)も雑賀衆が支援をして何度攻めても落とせませんでした。

そこで信長は、雑賀衆の本拠の攻撃を決心しました。理由は、石山本願寺のことだけではなく、自由・平等・平和を基本とする「共和国・雑賀」の存在が、信長の天下流布の最大の障害だったからでした。

一方、雑賀の民衆は、一向宗関係者だけでなく職業・身分・宗教をこえ、戦国最強の織田軍と一致団結して戦う決意をするのでした。

1577年(天正5年)2月。織田信長は6万をこえる精鋭部隊で雑賀を攻めました。これを迎え撃つ雑賀衆は、鈴木孫一・土橋若太夫を指揮官に農民・漁民を中心に若干の地侍を加えても1万に満たない兵力で、勝敗は、誰の目にも明らかでした。

孝子峠からの3万の大軍は中野城を1日で陥落させ、孫一らの平井城を包囲しました。また、雄山峠から侵入した3万の織田本隊は、「雑賀川左岸(小雑賀)」に布陣しました。さらに、抵抗の激しい平井城の攻撃部隊も本隊に合流しました。これに対し雑賀衆は、秋

葉山を本陣に織田軍の対岸に布陣し、雑賀川が決戦の場となったのです。

戦いは、数に上回る織田軍が強引に攻撃をおこなうが、雑賀衆は知恵を使いゲリラ戦などの戦術を駆使し、これに対抗しました。戦闘は、1ヶ月を費やし雑賀全土が炎に包まれるが、なかなか決着がつかず、信長の体面をつくろうかたちで和睦をし織田軍が雑賀から撤退したのでした。

また、7月にも織田信長は7万の大軍で攻めてきますが、またも撤退させるのでした。織田信長は、石山本願寺合戦から三度の戦いに勝利することができませんでした。

この二度の雑賀攻めは、織田信長が雑賀衆に敗北したと全国に広まり、各地で勇敢に戦った雑賀衆に喝采がおきたといえます。

この合戦の後に、雑賀衆は信長と協定を結び、雑賀に平穏な日々が続くのでした。

また、孫一も歴史の表舞台から退くのでした。

(実は、様々な伝承が残されています)

また、信長との戦いで石山本願寺を脱した本願寺顕如は、雑賀衆によって「雑賀御坊(鷲森別院)」に迎えられ、大阪を経て京都の西本願寺に移るまでの3年の間、雑賀御坊が一向宗(浄土真宗)の本山の役割を果たしてきました。



左岸に織田軍が布陣した。遠くに、雑賀衆の本陣「秋葉山」が見える。

羽柴秀吉の雑賀攻め(太田城の水攻め)

本能寺の変で信長が討たれ、その後、羽柴秀吉が天下統一をめざし、信長が失敗した雑賀攻めを進めました。

1585年(天正13年)3月、和泉国の岸和田や貝塚を戦場に雑賀衆(太田・土橋)、根来衆をはじめとする紀伊勢が10倍以上もの秀吉軍と激戦を繰り広げ、そして貝塚での激戦で老人・女性・子どももふくめた4千人以上もの犠牲を出し、紀伊勢が壊滅的打撃をうけてしまった。そして秀吉軍は、二日間の休養のあと風吹峠から根来寺に攻撃を加え、各所に放火し、略奪の限りをつくした。この時、根来寺には壮麗な大塔伽藍をはじめ2千近くの寺院があったが、その殆どを焼きつくしてしまった。

やがて敗走した雑賀衆や根来衆は「太田城」に立て籠もりました。太田城の様子は、当時の記録によると、『この城郭まるで一つの町のようにあり、雑賀の財宝の粋が蓄積されていた。そこには根来衆と雑賀衆の主だった指揮官が全員終結し、太田左近以下4~5千の人々が籠もっていたが、その大部分が(和泉と同じように)老人、女性、子どもたちであった。』と記されていました。これに対して、太田城攻めに動員された秀吉軍は、6万を超える大軍といわれています。

秀吉は、大軍で小さな平城である太田城を取り囲み様々な攻撃を仕掛けるが、ことごとく失敗して、甚大な被害を受けました。そこで秀吉は、備中高松城を攻めるときにも使った「水攻め」に作戦を変更しました。

秀吉は、太田城を遠巻きにして周囲10kの堤防を築いて、紀ノ川の水を引き入れるというもので、堤防が完成して水が入ると雨も手伝って浮き城のようになっていました。

1ヶ月近くたった頃のこと、秀吉の「農民の命を救う」という和睦案を受け入れ、太田左近以下一族や主だった者(国人・地侍ら)53名が自決して開城しました。

秀吉は、この首級を鉄棒で刺し、堺と大坂の街道沿いに晒しています。さらに、自決した53名の家族など28名を磔刑にし、城に火をかけ太田城を消滅させてしまいました。

また開城の際にも多くの女性や子ども

が溺死したという記録が残っています。

またこの戦いで秀吉軍は、和泉南部、雑賀の神社仏閣をことごとく焼き討ちしていたのです。

太田城を攻略した直後、秀吉は「和歌山城」を築城し、弟の羽柴秀長に任せて高野山・粉河寺・根来寺・熊野など、かつてポルトガルの宣教師、ルイス・フロイスが「5つの共和国」と記した紀伊国の支配をすすめていきました。また、全国にさきがけ「刀狩」を行ない身分の固定化をすすめました。

秀吉との戦いで「雑賀衆」は終焉をむかえ、歴史から姿を消します。しかし、各地で様々な伝承が残っていますが、その真偽は定かではありません。また、海を渡った韓国でも雑賀衆の末裔が活躍したという「沙也可」の話が伝わっています。

信長や秀吉と雑賀衆の戦いは「中世の終わり、近世のはじまり」の出来事として、日本史の大きなターニングポイントといわれています。



太田左近の像(和歌山駅東口)

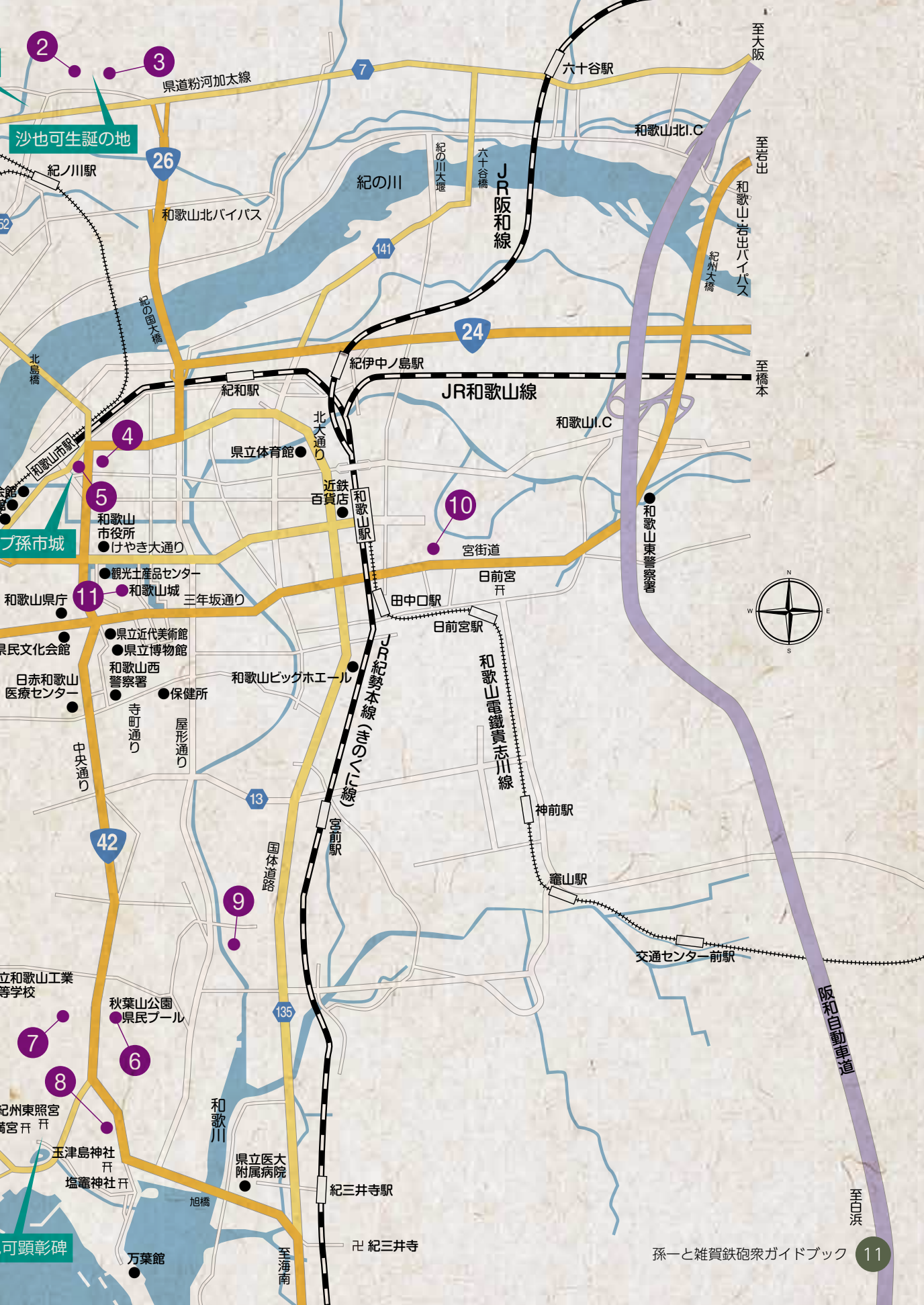
雑賀衆ゆかりの地を訪ねて



〈雑賀衆 ゆかりの地〉

- | | |
|------------|------------|
| ① 中野城跡 | 沙也可生誕の地 |
| ② 平井城跡 | ショップ孫市城 |
| ③ 連乗寺 | 東照宮・沙也可顕彰碑 |
| ④ 本願寺鷺森別院 | |
| ⑤ 鷺森別院界限 | |
| ⑥ 秋葉山 | |
| ⑦ 矢の宮 | |
| ⑧ 雑賀城跡 | |
| ⑨ 雑賀川の合戦場跡 | |
| ⑩ 太田城跡 | |
| ⑪ 和歌山城 | |





沙也可生誕の地

孫市城

可頭彰碑

2 3

4

5

11

9

7

8

6

10

7

8

6

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33



①中野城跡(なかのじょう あと)



中野城跡(パームシティー北)

築城年代は不明。
平城で、和泉から雑賀に入る正面に位置する。最近の発掘で堀や遺構の跡が確認されている。

雑賀衆のひとり貴志氏が護るが、信長の雑賀攻めの最初の標的になり、3万の大軍の前に1日で陥落したといわれている。現在、「貴志南小学校」に隣接している。

交 延時団地バス停から西へ、徒歩10分

②平井城跡(ひらいじょう あと)

築城の時期は不明だが、鈴木孫一による。この地は、古代からの旧南海道や近くに港があり、雑賀の交通や防衛の要所である。

城の形式は、自然の段丘を生かしたもので一段2~3メートルにそれぞれ柵や板塀を設け、塹壕などの備えをしていた。三段ほど上がると最上段が「平井平」で雑賀が一望できる。

中段の広い所に「政所」や「道場」、孫一の屋敷をおいていた。

中野城陥落の直後、孫一はこの城で織田軍3万と攻防戦を繰り広げた。



平井城跡(平井中央公園)

交 南海本線「紀の川駅」を下車、北へ15分

③蓮乗寺(れんじょうじ)



蓮乗寺山門

浄土真宗本願寺派の寺院。平井城跡の東側に位置する。

孫一ゆかりの寺院として有名で、孫一が開いた一向宗の「孫一道場」がそのはじまりとされている。もともとは平井城跡・政所ノ坪と呼ばれた場所にあったが、後に現在の場所に移転したといわれている。

寺院には、信長の雑賀攻めのときに負傷した孫一の身代わりに血を流したという伝説や境内に「平井孫市郎」という銘の墓石がある。

また、近くに「孫一」や「本願寺顕如」にゆかりの寺院「教願寺」「善教寺」、和泉に抜ける隠し峠、信長の雑賀攻めゆかりの「打手川」がある。



「平井孫市郎」銘がある墓石



平井地区周辺地図

④本願寺鷲森別院(ほんがんじさぎのもりべついん)



本願寺鷲森別院

浄土真宗本願寺派別院。

1476年(文明8年)、本願寺蓮如によって創建。弥勒寺に代わって「雑賀御坊」として紀伊の一向宗布教活動の拠点の役割を担う。発掘調査で、創建当時は現在よりも数倍の大きさであったことが確認されている。

雑賀の一向衆徒の信仰の中心で、石山本願寺を逃れた本願寺顕如をむかえいれ本山が大坂へ移るまでの3年間、全国の一向宗の本山の役割を果たした。

交 南海本線と歌山市駅より南東へ徒歩10分

⑤鷲森別院界わい(さぎのもりべついん かいわい)

南海本線と歌山市駅から鷲森別院周辺の地域。

ここは、雑賀衆全体の経済活動の中心で、交易(さつまあきない)の拠点「紀伊湊」(和歌山市駅の北側)や「三日市」の古い地名が残っている。

また、この地域に古代から受け継がれる韓鍛冶の伝承もあり、「雑賀鉢」が発見され、甲冑や武具、鉄砲の製造と深く関わりのある地域だといわれている。

紀州藩時代の名残で「宇治鉄砲場」という町名もある。今、街の活性化に向けて「孫市祭り」も毎年3月に催されている



南海和歌山市駅周辺

なお、アンテナショップ「孫市城」で、グッズ販売をおこなっている。

⑥秋葉山(あきばさん)



秋葉山・弥勒寺城跡

弥勒寺山、御坊山ともいわれている。鷲森別院が出来るまでの間「雑賀御坊」として紀伊の一向宗徒の信仰の中心。

山頂から雑賀全体が眺望でき、織田信長の雑賀攻めの時、全山を要塞化して、雑賀衆の本陣とした。山頂に顕如上人の碑が建てられている。

交 秋葉山バス停

現在は、秋葉山公園として市民の憩いの場所になっている。古い「御坊山」の表示もされている。

⑦矢宮神社(やのみや じんじや)

由緒は、神武東征の時の、熊野からの道案内「金鳥」にまで遡る。

賀茂建津之身命(かもたけつのみこと)、またの名は「八咫鳥命(やたがらすのみこと)」を祀っている。

雑賀衆の守り神で、信長の雑賀攻めのとき孫一をはじめ雑賀衆が必勝を祈願したという逸話が残されている。

社殿や文書は、信長軍によって焼失し、現在の社殿は徳川になってから再建されたもの。



矢ノ宮

交 秋葉山バス停から西へ5分

⑧ 雑賀城跡 (さいかじょう あと)



雑賀城跡

妙見山城ともいう。

「続紀伊風土記」によると、孫一の父「鈴木佐太夫」が築城したといわれている。和歌浦湾から紀伊水道を一望できる。佐太夫は、この城を拠点に交易で財を成したとか、山頂の西側に城下町を整備していたというのが確証はない。

雑賀城のある和歌浦周辺は、古代から風光明媚で様々な和歌にも詠まれている。名所も数多くある。

交 和歌浦バス停

⑨ 雑賀川の合戦場跡 (さいかがわ かつせんじょうあと)

現在の和歌川。川を挟んで左岸の織田軍5万に雑賀衆が対峙した。雑賀攻めの主戦場である。

圧倒的に劣る雑賀衆が、事前に川底の仕掛け(壺・柵)、柵や塹壕で迎え打つ、騎馬隊が強引に川を渡るが途中の仕掛けで足を取られている時に、鉄砲衆が一斉攻撃をかけ、織田軍が大被害を受けたという逸話も残されている。

戦は、一ヶ月も続き、各所でも雑賀衆のゲリラ戦が展開された。



和歌川右岸側から織田軍の陣の方を臨む

交 宇須バス停

⑩ 太田城跡 (おおたじょう あと)



太田城本丸の跡といわれている来迎寺

雑賀の東部に位置する「雑賀衆終焉の場所」。築城は、紀伊国造家・紀氏が日前宮の守護のために建てたもので、堀と石積み・土塁を持つ雑賀では唯一城らしい形式をもつ。

鈴木孫一のライバルといわれる太田左近で、根来衆と関係が深い。

羽柴秀吉の雑賀攻めのとき、和泉での戦いに大敗し、根来衆とともに籠城するが、5万以上の大軍に包囲され、水攻め(備中高松城、後の武州忍城と並んで有名)の末に開城する。

ここに「雑賀衆」が終焉を迎えた。

交 JR和歌山駅、東南へ10分「来迎寺」へ



犠牲者の慰霊碑・小山塚



来迎寺境内・太田城の碑

⑪和歌山城(わかやまじょう)



和歌山城(築城時の頃の大手門から)

秀吉は、太田城開城の後、太田城をはじめ雑賀の城や神社仏閣を破壊するとともに、和歌山城の築城にとりかかった。

城主を弟・秀長にし、紀伊国全体を押さえ四国を睨んでの目的である。城はその後、浅野氏の時代を経て徳川御三家の紀伊家になる。

時間があれば…

- 岡山城跡……………和歌山城の南、太田城攻めるとき雑賀衆が立て籠もり秀吉軍に抵抗をした。和歌山城築城のときに取り壊される。
- 中津城跡……………JR紀和駅の南、孫一が切腹したという話が残されている。
- 大立寺(だいらりゅうじ) ……JR紀和駅から西へ15分、橋向丁交差点近く太田城の大手門が移転の末、戦後この寺に移築された。

平井文化会館…

平井地区(平井城・蓮乗寺他ゆかりの場所)案内
雑賀衆に関わる様々な語り部

「孫市の会」

雑賀孫市(孫一)は和歌山の宝!

手作りの祭りで、孫市の魅力を伝えたい

私たちは、南海和歌山市駅周辺の商店街の活性化にむけて、名物や名産をつくるとりくみをしていました。しかし、この地域は「雑賀衆の本拠の街」とのアドバイスを受けました。

この街は中世末期に、本願寺雑賀御坊(鷲の森別院)を中心に、港や市場があり、雑賀衆と呼ばれた人々の経済や信仰の中心地だったのです。

そして、雑賀鉄砲衆とそのリーダー孫市は、あの織田信長の最大の敵として、戦国の時代に異彩を放つ存在でした。

地元では様々な武勇伝や鉄砲にまつわる話が伝えられています。そんな雑賀衆と孫市を埋没させることなく、「和歌山の宝」としてアピールしていきたいと考え、10数年前に「孫市の会」を立ち上げました。

孫市の会の活動

- 甲冑製作・教室
- 各地の祭り、イベントでの甲冑行列
- 郷土史の語り部
- 講演会
- 孫市まつりの開催

第11回 孫市まつり
平成20年度和歌山県文化振興事業費補助金
追分の鉄砲演習と時代活劇 茶屋・雑賀孫市へ会いおう
「大集合!」
THE BEATライブ
高瀬龍太郎
語り部ちゃんこの活躍!
2015年3/29日 11:00~16:00
本願寺鷲森別院 お上げその屋敷 無休通行
孫市まつり実行委員(0930-4630) 雑賀の鉄砲演習が通行止めになります。
和歌山県和歌山市本願寺山内町1番地(和歌山県立和歌山大学) 和歌山県立和歌山大学
和歌山県立和歌山大学 和歌山県立和歌山大学 和歌山県立和歌山大学 和歌山県立和歌山大学
和歌山県立和歌山大学 和歌山県立和歌山大学 和歌山県立和歌山大学 和歌山県立和歌山大学

<第11回「孫市まつり」(毎年3月末の日曜日)

日時 2015年(平成27年)3月29日(日)

- [内容] ①武者行列 ②鉄砲演奏
③野外劇「雑賀孫市」 ④音楽イベント
⑤仮装コスプレ ⑥記念講演
⑦歴史キャラクターサミット ほか

「孫市城」雑賀衆グッズ <http://magoichi.or.tv/>

孫市の会事務局 073-423-3136 ビジネスイン南海(森下)

「沙也可」で街おこしの会

韓国の英雄「沙也可」の功績を称える「韓日友好館(鹿洞書院)」が、2012年に韓国の大邱市郊外に建設され、関係資料の展示と沙也可が雑賀衆ゆかりの人物であるとして和歌山コーナーが作られています。私たちは、この沙也可の伝承を契機に、日韓の友好と和歌山の街おこしをすすめようと様々なとりくみをすすめています。

沙也可(さやか)の伝承

今から420年ほど昔、豊臣秀吉は二度にわたって朝鮮を攻めました。その時、秀吉軍の行為に反発して数百人の鉄砲衆が脱して、朝鮮義勇軍として朝鮮の人々を助けました。そのリーダーが「沙也可」といい、その後も朝鮮の復興に尽くし、その功績で、王様から「金忠善」という名と土地を与えられました。韓国の大邱市の外れの「友鹿洞(ウロクドン)」という村に沙也可たちの子孫が現在も生活しています。

では「沙也可は誰か」については様々な意見がありますが、「雑賀衆の関係者」というのが有力で、現地でも雑賀衆の関係者として和歌山市との交流をすすめています。

和歌山市内には、「沙也可生誕の地(平井中央公園)」「沙也可顕彰碑(和歌浦、東照宮)」の他、日本と朝鮮の友好のゆかりの場所があります。

雑賀衆とあわせ、沙也可のことをもっと知っていただきたいと思う。



大邱市友鹿里にある金忠善將軍を祀る施設
鹿洞書院(沙也可記念館)



沙也可顕彰碑(和歌浦、東照宮内)

NPO法人「まち」

キャラクター Character

キャラクターデザイン／はねペン

わしの名は
「八咫」じゃ！
よろしくなあ！！



©はねペン



©はねペン

Move Active Create Hirai
運動、活動、創造する「平井」

特定非営利活動法人・まち(平井文化会館内)

〒640-8442 和歌山市平井72番地の1 073-451-2765

<語り部・ゆかりの地案内>

- 語り部・雑賀衆の歴史(45分)
 - 孫一と雑賀衆ゆかりの地案内(平井城周辺・45分)
 - 孫一と雑賀衆ゆかりの地案内(市内全域・90分)
- ※以上の他、人権学習、人権フィールドワークも是非に!



©はねベン



©はねベン



©はねベン

<孫一と雑賀鉄砲衆ガイドブック>

- 編集発行 特定非営利活動法人・まち(平井文化会館内)
〒640-8442 和歌山市平井72番地の1 (073-451-2765)
- 協力・後援 和歌山市観光課・市民協働推進課
孫市の会、雑賀衆・沙也可でまちおこしの会
一般社団法人 和歌山人権研究所

- 発行 2015年9月

※このガイドブックは、市民協働提案事業として製作されています